福岡県立嘉穂高等学校同窓会会報
「　龍　王　」
51号（平成26年11月1日発行）より

「いざ起て健児」

高40回生　担任　塚　本　　勉

平成26年度嘉中・嘉高同窓会の開催にあたり、本日の盛会を迎えられた皆さんに心からの敬意を表し、深く感謝申し上げます。

皆さんは昭和60年４月に母校嘉穂高校に入学、同じ昭和63年の３月に高校40回生として母校を巣立たれました。そして今日まで27年の歳月を経て、本日ここに再び集うこととなりました。まさに四半世紀を超える再びの出遇いであります。

卒業後これまで、皆さんはそれぞれの人生の歩みの中で、さまざまな困難辛苦に耐え、まさに現在、それぞれのもち場において責任ある中堅者として奮闘努力の日々を送っておられることでしょう。本日は、そうした者たちが一堂に会し、共に学び、競い、励ましあった「あの頃」に帰る日であり、また、懐かしい母校嘉穂の懐に抱かれ、故郷の風土に鋭気を養い、これからの人生の新たなる出発を共に誓いあう日でもあります。

思えば28年前、期待と不安に胸を膨らませの入学でしたが、その入学早々の集団宿泊訓練での応援団による目の覚めるような厳しい指導は、まさにそれまでの中学生気分を粉砕するに十分のものでした。２年生のスキー修学旅行では、スキー教室が終わって、宿舎のホテルでの食事の時でした。シーンとした一同静粛の中、食堂の空気を裂くように「手を合わせてー」という応援団伝授の一声に「戴きまーす」の全生徒の大音声。ホテル従業員の方々から、今時こんな学校があるのかという瞠目の眼差しを向けられ、私はその時の本校職員であることの沸々と湧きあがる誇りと喜びを今も忘れておりません。

そして、３年間の総まとめである大運動会は圧倒的な思い出として甦ってきます。四チームがそれぞれに優勝を目指して技を競い、懸命に走り、飛び、舞いました。懸命の走者を熱中して応援する皆さんの姿はまさに青春そのものでした。運動競技の最終盤、川中島の開始。私は、威風堂々と入場する騎馬武者の列を鳥肌が立つ思いで眺めていたことを鮮やかに思い出します。こうして競技最後のチーム対校の応援合戦が終わり、運動会最終の応援団による学校応援。見学される保護者、同窓生を含め、職員、生徒が一体となり、学校全体がまさに一つになった時でした。

運動会が終わり、夕闇迫る運動場。見学者、職員、そして１、２年の男子生徒と全女子生徒もすべて去った後、上半身裸、短パン一枚になった３年男子生徒によるストームの始まり。闇の中に赤く燃え上がる炎を囲んで駆けるこの伝統行事こそ嘉高生生涯一度の青春の爆発だと、私は遠い二階の校舎から感慨深く見つめたことでした。

他に文化祭、部活動、寒稽古等々、嘉穂での思い出はとても一口に語り尽くすことはできません。長い人生の中でわずか３年間だけの時間でしたが、皆さんにとってこの３年間こそ今の自分を支える精神を培う本当に貴重な時間であったことでしょう。「嘉穂魂」はこの嘉中・嘉高の風に吹かれ、共にここに青春を謳歌した者の心の帰点なのだと思います。

しかし、帰点は同時に起点でもあります。私たちは帰るべき所を共に一にする者であります。それは同時に、これからの人生を踏み出す起点もここに始まるということです。共に「いざ起て健児」の心意気を持って、それぞれに道は違いますが、「大和心の潔く」あらんことを胸に、これから先もさらに前進して行かれんことを心から願います。

最後になりましたが、当番会期の皆さんと役員はじめ、蔭ながら彼らを支えて下さったすべての方々に心から感謝申し上げます。